

Title	北陸MOTセミナー 北陸MOT改革実践 2008 「東京と北陸が連携したMOT改革ネットワークで確実に成果を創り出す」
Author(s)	
Citation	
Issue Date	2008-02
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5151
Rights	
Description	北陸先端科学技術大学院大学 21世紀COE プログラム 「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」



北陸 MOT セミナー

北陸 MOT 改革実践2008

—東京と石川が連携したMOT改革ネットワークで確実に成果を創りだす—

報告書

平成 20 年 2 月

主 催：北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科
共 催：文部科学省21世紀COEプログラム
「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」
後 援：独立行政法人中小企業基盤整備機構北陸支部
財団法人石川県産業創出支援機構

北陸 MOT セミナー「北陸 MOT 改革実践 2008」開催報告

日時： 平成 20 年 2 月 23 日（土）13:00～18:00

場所： 金沢市文化ホール 3 階・大会議室

メインテーマ： 東京と石川が連携した MOT 改革ネットワークで確実に成果を創りだす

主催： 国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科

共催： 文部科学省 21 世紀 COE プログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」

後援： 独立行政法人 中小企業基盤整備機構 北陸支部

財団法人 石川県産業創出支援機構

コーディネート： 株式会社 石川県 IT 総合人材育成センター

いしかわ MOT シンジケート

■セミナー&コンベンションプログラム

13:00 オープニング

13:00-13:05 開会にあたり

北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科長 中森 義輝 教授

13:05-13:15 セミナーの全体像

北陸先端科学技術大学院大学 学長補佐 近藤 修司 教授

13:15-13:45 基調講演「なにごとにも出会いから」

澁谷工業株式会社 取締役副会長 澁谷 進 氏

13:45-15:30 第一部「MOT 改革の実践で、確実に成果を創りだす」

・実践モデルの発表（発表時間：12分/1社）

◆企業改革実践モデル（6社）

株式会社 PFU

澁谷工業株式会社

小松電子株式会社

松本機械工業株式会社

株式会社横山商会・株式会社朝日電機製作所

サンシン電気株式会社

◆医療福祉改革実践モデル

医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院

◆地域改革実践モデル

七尾市役所

15:30-15:40 休憩

15:40-17:50 第二部「MOT改革パネルディスカッションとMOT見本市」
ー学習・体験・交流の場から改革の輪の創造へー

◆いしかわMOT見本市

MOT革新図書館とMOT見本市ツアー

◆いしかわMOTシンジケートやるぞ改革活動

○「いしかわMOTシンジケート改革創造ネットワーク」

いしかわMOTシンジケート幹事 砂崎 友宏 氏

○パネルディスカッション

モデレーター：いしかわMOTシンジケート代表幹事 滝本 幹夫 氏

パネリスト：東京MOT、いしかわMOTシンジケートメンバー

17:50-18:00 まとめ・講評

北陸先端科学技術大学院大学 学長補佐

近藤 修司 教授

18:00 クロージング

■MOTシンジケート交流会

会場：金沢ニューグランドホテル 4階・相生の間

18:15-20:15 第三部「MOTシンジケート交流会」

ー風の人と土の人の交じり合い広場ー

○開会

○挨拶

○乾杯

○懇親・交流・スピーチ

○締め

○閉会

オープニング



総合司会



いしかわ MOT シンジケート

中西 浄香 氏 (医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院)

開会にあたり

北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科長 中森 義輝 教授

【講演要旨】

本日は寒い中にもかかわらず、これだけ多くの方々にお集まり頂いたことに感謝申し上げます。

北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST) に知識科学研究科ができたのは 1998 年 4 月なので、今年で 10 周年となる。この 10 年の歴史の中で一番大きなものは 2003 年に MOT コースを作ったことである。これは、昨年亡くなった亀岡教授のご尽力によるところが大きい。

JAIST の東京 MOT コースは、学生の質が高いことが評価されている。現在の東京 MOT コースは主に井川教授が担当しているが、来年度からはさらに (株) 日立製作所出身の小坂教授が加わる。

東京 MOT コースから一年遅れて、ここ石川でも (株) 石川県 IT 総合人材育成センターの全面的なご協力を得て、いしかわ MOT スクールを開設することができた。こちらは近藤教授が主に担当している。東京と石川の違いは、石川の方にマテリアルサイエンス研究科 (旧・材料科学研究科) から 4 科目ほど提供していることであり、JAIST 内ではこれを統合科学技術コースと呼んでいる。

北陸 MOT セミナーは、これら東京と石川の MOT コースで学ぶ学生同士がお互いに刺激しあうことを目的に毎年開催している。本日の基調講演は、澁谷工業 (株) の渋谷進・取締役副会長にお出まし頂いた。それでは、皆さんにとって実りある会になるよう祈って、挨拶としたい。



セミナーの全体像

北陸先端科学技術大学院大学 学長補佐 近藤 修司 教授

【講演要旨】

日頃はJAISTの研究・教育活動でお世話になり、また今日は北陸MOT改革実践のセミナーに参加下さり、感謝申し上げます。北陸MOTセミナーは今回が4回目*である。MOTセミナーは東京MOTと北陸MOTや北陸の企業との交流を目的にして始めたものである。

我々の知識科学は改革実践をテーマにしており、毎年一つか二つは新しい試みを行っている。今年の新しいことの一つ目は、場所がここ（金沢市文化ホール）となったことである。今まではJAISTで行っていたが、研究と教育の成果を社会に問うため、地域の中心へ出てきた。

ここで地域を代表する企業から基調講演と発表を行って頂く。二つ目の新しいことは、成果物が人材育成や考え方の研究ではなく、具体的な技術や製品となったことである。今日は、4画面を背景として製品や技術を展示している。

本日の最後には懇親会もある。今日の前半は勉強して、後半は懇親して頂きたい。

私はおかげさまで、この地域が第二のふるさととなった。この地域の文化や人柄にはパワーがあると感じている。

今日は東京から12名が参加している。東京のメンバーから一言ずつお願いして、本日のスタートを切りたい。

（東京MOTメンバー）北岡、杉山、山田、近藤、矢野、友田、小林、河野、川村



*（報告者注）北陸MOTセミナーは、2004年の第1回から数えると、今回が6回目である。

基調講演「なにごととも出会いから」

澁谷工業株式会社 取締役副会長 澁谷 進 氏

【講演要旨】

今日のテーマを「出会い」として、最近感じたことと、感心した青年についての話をする。J.ルソーが言った「全ての人は幸福を求める。しかし一体何が真の幸福かを考える人は少ない」という考えは、幸福を事業と置き換えると経営にも通じる。

去年の11月に、米国ボストンから来た青年（デービッド・ホルナー君：29歳）が東京での勉強会で、「米国社会は病んでいる。MBA学生ほとんどが金融界へ流れ、地道なものづくりや教育に従事する人たちが正当な評価を受けていない。カネを持っている者が虚業に近いマネーゲームに陥っており、日本がそれを真似しようとしていることに危惧している。」と語った。彼は進路を模索中で、いまま日本に残る、人間を中心としたマネジメントを行っている中小企業の後継者になりたいという。また彼は、私が紹介した原丈人氏（「21世紀の国富論」の著者）と「よい会社とはどうあるべきか、人間の幸せとはどうあるべきか」を研究しようと合意した。



「出会い」について私は、Whom（誰を知っているか＝コネ）、What（何をやるか＝商品）、Who（己を知る＝コアコンピタンス）をキーワードとしている。私自身は機械屋であるが、30歳代半ば以降は新規事業を常に追い求める体験をしてきた。いつも「人がいない」と思ったがるが、ある時、「『人がいる』と言ったら、その人がやるよ。人がいないから、お前がやらせてもらっているんだ。」と言われた。自分にはどういう技術があるのか、何があって何が欠けているのかをはっきり認識することが大事である。

MOTでは皆さんがテクニックやハウツーを学んでいるとは思わないが、決め手はやっぱり「人間力」であろう。「人間力」は定義しようがないが、自分はどんな人間なのかを考えることである。人間力さえあれば事業が上手くいくわけではないが、いま自分に与えられている人間力は何なのかを考えることが一番大事である。

ダメな経営者は、「うちの会社はダラ*ばっかりや。」というが、人材があれば何かができるわけでもない。事業とは、何かを作ってどこかへ売っただけである。平凡な人間が集まっ

* 金沢の方言で、「馬鹿」の意味。

て非凡なことを成し遂げるのが男のロマンである。「経営力=人間力」、これがMOTの基本だと思う。

デービッド君も指摘したように、いま理系離れが深刻である。当社にも文系・理系の人間がいるが、文理融合してはじめて世の中が成り立つ。MOTとは、文理融合で社会貢献することが本質ではないか。昔はIE（工業経営）という言葉が流行ったが、MOTという一つのキーワードで、日頃感じていることを2点お話した。



第一部「MOT改革の実践で、確実に成果を創り出す」

『改革実践モデル』発表リストおよび進行スケジュール

発表順・実践モデルテーマ		発表者	時間
● 企業改革実践モデル			13:45～14:49
1	PFU未来塾による組織活性化 ～我々が未来を創り出す～	株式会社PFU 石黒 渉	13:45～13:57
2	場の創造によるオンリーワン商品開発	澁谷工業株式会社 上田浩司	13:58～14:10
3	環境事業の創出と地域連携 ～自分たちの生ごみは自分たちでリサイクルしよう～	小松電子株式会社 高村昌克	14:11～14:23
4	<MOT改革>やる気がでる、やりがいのある職場創りの実践 ～先端職人経営をめざして～	松本機械工業株式会社 津田美樹	14:24～14:36
5	社内風土改革活動 “あいあいプロジェクト” ～四画面思考を利用してインターナルイノベーションの創出～	株式会社朝日電機製作所 株式会社横山商会 砂崎友宏 土倉 浩	14:37～14:49
6	サンシングループのMOT改革実践 ～学んだことを実践の場で即活用！～	サンシン電気株式会社 佐竹右幾	14:50～15:02
● 医療福祉改革実践モデル			15:03～15:15
7	脱皮 ～次世代型ヘルスケアコミュニティ”のびのび能美”への挑戦～	医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院 仲井培雄	15:03～15:15
● 地域改革実践モデル			15:16～15:28
8	地域を元気にする七尾市経済再生プロジェクト	七尾市役所 瀧音 悠	15:16～15:28

※一件当たり発表時間:12分(発表10分、質疑応答2分)
 ※※ 発表者敬称略

第一部コーディネーター



いしかわ MOT シンジケート

多河 吉泰 氏 (株式会社 PFU)

PFU 未来塾による組織活性化
～我々が未来を創り出す～
株式会社 PFU 石黒 渉 氏

【発表要旨】

私は当社の Active-V 推進室で、全社の改革活動を支援する仕事をしている。今日は PFU 未来塾について、やったこと、わかったこと、次にやること、ありがたい姿の話をする。

当社は石川県かほく市に本社を持つ、イメージスキャナ、情報端末開発製造、ソリューションサービスの会社である。全社方針として、製品・技術・人と組織のマネジメントの確立を目指しており、特に人と組織の活性化を重要視している。



Active-V 推進室は、Rising-V 活動、見える化推進、知空間、アイデアスナップ、PFU 未来塾の 5 つの活動を行っている。その中の PFU 未来塾では、人間力強化を中心課題として講義やグループワークを行ってきた。そのような活動の中でわかったことは、仲間が出来て、いろいろなことに気づき、何かをしなければならぬと見えるようになったことである。四面思考や見える化で常に活動を振り返り、改良を加えていった。ありがたい姿は、人と組織の活性化で、全員で未来を創り出すことである。

場の創造によるオンリーワン商品開発 澁谷工業株式会社 上田 浩司 氏

【発表要旨】

テーマを「場の創造によるオンリーワン商品開発」と題して紹介する。当社は 1931 年に創業され、世界トップの技術開発やニュービジネスの積極展開、M&A の推進で 1,000 億円企業を目指している。売上の 7 割をパッケージプラント事業が占め、残りの 3 割をメカトロシステム事業が占めている。

当社の改革実践は、理念の共有（誕生会）、三カイ（改善・改革・開発）の実践、改革実践システム（SSD 小集団活動、目標経営管理）、利益計画である。

MOT による改革実践はまだ導入期で、個人的なスキルアップの段階である。いしかわ MOT シンジケート活動や四画面思考の実践、啓蒙活動で、組織および全社に浸透を図っている。

実践モデルは場の創造としてミーティングを実施し、事業部間の連携で商品開発を行っている。そこで生まれたのが再生医療向けオンリーワン商品である。いま開発中の新しい診断治療システムは知のスパイラルを使い、ユーザー間での場の創造による成果である。

場の創造実践に必要なのは「橋渡しの出来る人材」であり、MOT による改革実践を早く全社および地域に展開していきたい。



環境事業の創出と地域連携
～自分たちの生ごみは自分たちでリサイクルしよう～
小松電子株式会社 高村 昌克 氏

【発表要旨】

当社は小松市の安宅の関近くにある総合電子システムメーカーである。今日は、環境事業の創出と地域連携～自分たちの生ごみは自分たちでリサイクルしよう～というテーマでお話する。当社の環境事業は、自社開発の業務用生ごみ処理機を、注文を受けて一気に 200 台製作したことから始まる。機械売り切りのつもりであったが、実際はクレームが多発し対応に追われた。これは機械ではなく「バイオ菌」という生き物と認識した。

ちょうどその時に JAIST の MOT コースがあり、このテーマを選んで会社に場づくり（プロジェクトチーム）をした。そこでわかったことは、技術力+人間力+自然力で、単に生ごみ処理機の導入ではなく循環システムの導入が必要なことと、お客様への安全と安心の提供には MOT ネットワークのような人のネットワークが必要なことである。

半年間の MOT コース終了後に実施された最初の工場見学会が当社であった。ここで発足した MOT シンジケートが応援団となり、異業種の連携が生まれた。独自のノウハウやレンタル制度、学校等への生ごみ循環システムの導入で、在庫はようやく 111 台となった。また社内でも、全社員に環境循環システムの関心を持ってもらうため会社敷地内に野菜畑をつくるなど、社員を巻き込み参加してもらう取り組みを行った。

いしかわ MOT シンジケートの連携で、人や地域とのネットワークが広がり、地域社会へ貢献し価値創造につながることを目指している。



＜MOT 改革＞やる気がでる、やりがいのある職場創りの実践
～先端職人経営をめざして～

松本機械工業株式会社 津田 美樹 氏

【発表要旨】

当社は金沢市内に本社・工場を持つ工作機械周辺機器の製造販売を行う会社である。今年で創業 60 周年となる。当社では企業理念を明確にし、全社員で毎日の全体朝礼を行うほか、社是・社訓を毎月、社員全員で唱和している。

工作機械は景気に敏感で繁閑の変動が大きく、受注の安定化が求められた。また生産管理・品質管理技術の向上が急務となった。このような問題に全社員が取り組む先端職人経営を目指すことにした。そこで MOT による組織改革および人材育成を図ることとした。

まずは組織革新 3 ヶ年計画を四画面思考法に基づいて考えた。自分が働きたい会社を心がけるため、社内外のアンケートや全社員の議論を経て、四つの取り組みテーマを決定し、具体的に二つの取り組み（食堂・職場ミーティングスペースの改善、挨拶習慣運動）を開始した。この活動を社員全員に理解してもらうのは難しかった。時間は掛かるが、すべての提案が実現するまで継続的に取り組もうと考えている。

当社の 10 年後の姿として、全員が主役でイキイキと先端職人経営ができるよう、コツコツと改革を進めるつもりでいる。



社内風土改革活動 “あいあいプロジェクト”
～四画面思考を利用してインターナルイノベーションの創出～

株式会社朝日電機製作所 砂崎 友宏 氏

株式会社横山商会 土倉 浩 氏

【発表要旨】

この発表では、グループ企業の MOT 実践事例について話す。我々は社内風土改革活動である “あいあいプロジェクト” を進めている。

横山商会は EMS（電子機器の受託生産）事業を行う地域商社であり、朝日電機製作所はその生産部門を担当している。主要な製品としては液晶ディスプレイ制御基板などがあり、自社開発製品として寿司のタッチパネル注文機がある。

当社が MOT に参加した歴史は、私（砂崎）が 1 期生として受講したことから始まる。四画面思考は、いしかわ MOT の 1 期生が終わる頃に誕生した。その当時は実践の項目が入っていなかったが、石川では実践が大切と感じて、その後に加えたのではないかと。

MOT スクールに参加して気づいたことは、一期目では経営トップのコミットメントが重要であること、二期目では MOT 仲間と改革活動実行計画が必要なこと、三期目では工場でも「なぜ？」を考えるのが必要なこと、などである。



横山商会と朝日電機に四画面思考法を導入し、全社的に広めた経緯をお話する。スローガンとして「インターナルイノベーションの創出」を掲げ、19 年度方針として人間軸の改革をスタートした。「あいあいプロジェクト」とは、**Internal Innovation** に由来している。

私（土倉）の取り組みとして、個人のインターナルイノベーションをまずやってみることにした。それを全社員へ展開しようと考え、社員全員の四画面を作った。四画面を定着させるため、他企業の見学（芳珠記念病院）や、全社員の四画面発表会なども行った。皆の四画面をグループウェアで共有するため、あいあいプロジェクト通信や振り返り表も作った。「やるぞ君」を増やして、自分の会社を働き甲斐のある企業にしたいという気持ちでやっている。

サンシングループの MOT 改革実践
～学んだことを実践の場で即活用！～
サンシン電気株式会社 佐竹 右幾 氏

【発表要旨】

会社は東京であるが、私（佐竹）自身は石川県出身である。石川の MOT 企業とも取引がある。今日は皆さんと出会えたセレンディピティ（偶然の幸せ）と思って話す。

サンシングループは 5 社ある。グループ会社にはカメラのストロボ管を作っている会社もあり、国内シェアは 30%である。知らないところで皆さんが当社の製品を使っている可能性がある。当社の組織図には社長を記載していない。役付役員が大学院へ通っている。社内に SANSHIN 大学を設けて講師を呼んで、社員研修を行っている。近藤先生にも講義をして頂いたことがある。

学んだことを基にして、サンシングループの五標（五つの目標）を掲げた。MOT を成功させる方法を、さっそく学んだ KJ 法を使い、みんなでディスカッションしながら検討している。

当社はファブレス（工場を持たない）企業のため、協力会社も巻き込んだのイノベーション・システムを掲げている。これによって、知識創造複合企業を目指している。

夢を実現させる「成功の宣言」を考える合宿を行った。そのときに宣言したこと（雑誌への連載コラム執筆）が実現しつつある。

学んだことの中から良い物を、部下・社員・現場に落とす、という方針でやっている。



脱皮

～次世代型ヘルスケアコミュニティ “のびのび能美” への挑戦～
医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院 仲井 培雄 氏

【発表要旨】

当医療法人は石川県能美市、ヤンキース松井選手や森・元首相の出身地で、JAISTのお膝元に位置している。今年で設立 25 周年、地域の中核医療を担う病院である。今年のテーマを「脱皮」～次世代型ヘルスケアコミュニティ “のびのび能美” への挑戦～と決めた。

2003～2004 年度、私（仲井）が理事長になったころは病院の皆に元気がなく、挫折感があった。そのときに JAIST 知識科学の近藤先生と出会っていろいろな気づきを頂き、「やらされ感」から「やるぞ感」への病院 MOT 改革をスタートさせた。2006 年度は、愛される病院、質の高い病院を目指した MOT 改革の実践で、場作りやオフサイトミーティングを行った。また和楽仁塾を開設し、近藤先生にも講義をして頂いた。いしかわ MOT スクールには 1 期生から参加している。個人と組織の四画面を作っている。四画面思考はなかなか良いと皆が感じている。四画面思考のワークショップを行い、これをもとに事業計画を作った。やったことやわかったことのカレンダーも作った。改革の輪が広がって、いろいろな方々との交流会も行った。JAIST の地域再生システム論にも参加し、「地域コミュニティ」の大切さも意識し、「のびのび能美！」の四画面も作った。

しかし、気づいたら赤字だった。その原因を突き止めるため、四画面の振り返りを行った。わかったことは、時間の使い方が悪いことであった。そこで研修会を行い、あらゆる職種の人たちが話し合っ四画面を作り直した。

皆さんは伊勢エビの脱皮をご存知と思うが、この変態は甲殻類の中でもっとも劇的と言われている。伊勢エビの成長過程と病院 MOT 改革を重ね合わせ、全員主役で全員脱皮を目指す。



地域を元気にする七尾市経済再生プロジェクト 七尾市役所 瀧音 悠 氏

【発表要旨】

七尾市は能登半島中央部東側に位置している。地域の状況については、強みとして豊富な地域資源（能登野菜や和倉温泉など）がある。しかし弱みとして人口減少と少子高齢化や後継者不足の問題があり、近い将来に地域を支える担い手がいなくなる。そのような危機感から七尾市経済再生戦略プランを策定し、近藤先生にご指導頂いた。

取り組みの状況は、平成 17 年に経済再生プロジェクト推進室を設置し、のと七尾人間塾をスタートした。平成 18 年にはのと七尾再生祭りを開催し、経済産業省の広域市町村圏産業振興ビジョン調査モデル事業に採択された。

平成 19 年度の改革実践として実施したことは、次の四つである。

一つ目はのと七尾人間塾で、人間力の向上・改革実践・塾生ネットワークをテーマとし、修了生はここで学んだことを各職場で実践している。今年度の第三期生は、四画面から一歩進んで改革実践提案書を作成した。また卓上用四画面パネル（A4 サイズ）も作った。

二つ目はのと七尾再生祭りで、地域資源の交流の場を創出し、改革ネットワークを構築した。能登半島地震の際の七尾市再生支援寄付金で、七尾再生元気大賞を表彰した。

三つ目はのと七尾女性起業塾で、女性に特化した生活起業型の実践的な起業塾によって元気な女性を育てた。場を与えることで、チャレンジショップに取り組む女性も現れた。

四つ目は七尾市中能登町広域圏産業振興ビジョンで、推進組織として四つのグループ（観光集客交流・繊維産業・木材産業・食産業）を立ち上げた。今年になって、能登の旨味フェスタや能登鍋コンテストを実施している。

これからの七尾市は人口減少が加速する。地域の資源（人・物）を育て、地域の活性化を図りたい。



第二部 「MOT 改革パネルディスカッションと MOT 見本市」 －学習・体験・交流の場から改革の輪の創造へ－

・石川 MOT 見本市

参加企業紹介ダイジェスト版

株式会社 PFU

澁谷工業株式会社

ニッコー株式会社

医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院

株式会社横山商会&株式会社朝日電機製作所グループ

小松電子株式会社

サンシン電気グループ・シンフォニーエレクトロニクス株式会社

・各社ブース展示

・いしかわ MOT シンジケート活動紹介

いしかわ MOT シンジケート幹事 砂崎 友宏 氏

・パネルディスカッション

東京 MOT および いしかわ MOT シンジケート メンバー

第二部コーディネーター



いしかわ MOT シンジケート

清水 浩之 氏 (明和工業株式会社)

いしかわ MOT 見本市・ダイジェスト版



株式会社 PFU 多河 吉泰 氏

当社の事業は、業務用イメージスキャナ、キオスク端末、ソリューションの3つが柱である。また、ブースには PFU 未来塾の四画面も展示している。



澁谷工業株式会社 村松 鋭一 氏

当社の事業はボトリングシステムとその波及製品である。MOT 修了生はこれまで4名で、各部門のリーダーとなって問題解決に当たっている。



ニッコー株式会社 滝本 幹夫 氏

当社の事業は、風力発電、浄化槽、そして陶磁器や電子セラミックスが柱である。MOT では、顧客に期待と感動を与える技術や製品の提供を宣言して取り組んだ。



医療法人社団 和楽仁 芳珠記念病院 仲井 培雄 氏

医療機関の質は、医療の質と経営の質で成り立つと言われている。先ほどは経営者の視点で話したので、今は医療人として話す。当病院のイメージ映像をご覧ください。



株式会社横山商会&株式会社朝日電機製作所グループ 砂崎 友宏 氏

当社のブースには、デモプロ（試作して見せる）のすし注文機と画像認識装置を展示する。また、あいあいプロジェクトを MOT の四画面で振り返った様子も示す。



小松電子株式会社 高村 昌克 氏

当社の事業は EMS 基板の実装組立設計、FA 機器の開発製造販売等である。今日は、環境部門の生ごみ処理・堆肥製造装置“レコパワー”が完成した様子を紹介する。

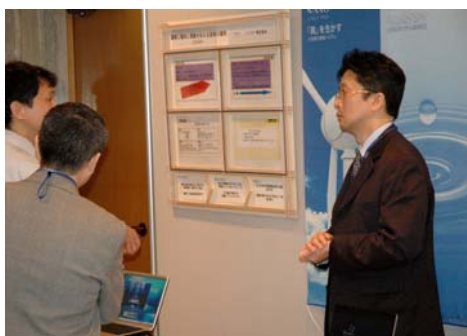
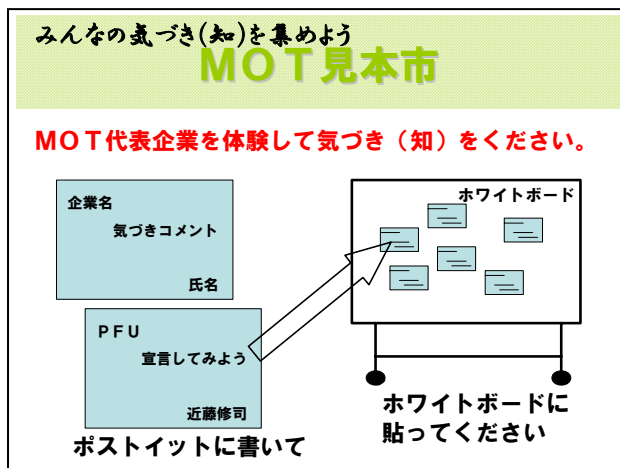


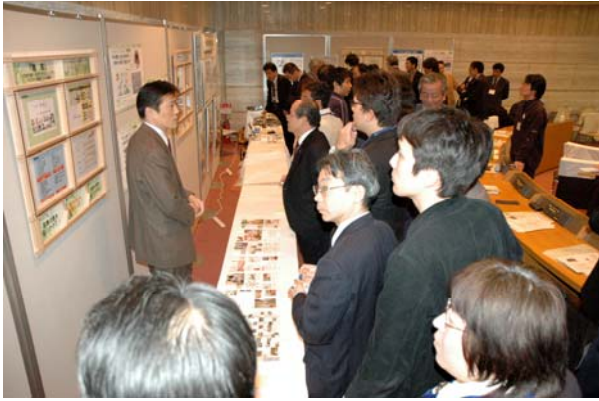
サンシン電気グループ・シンフォニーエレクトロニクス株式会社

佐竹 右幾 氏

当社は東京にある電子部品の企業である。製品ブランドとして、サンシン電気とシンフォニクスを使い分けており、シンフォニクスは自社製品のみを取り扱っている。

MOT 見本市では、各ブースを見学した参加者が、気づいたことを付箋紙に記入する。
その付箋紙のコメントをもとに、パネルディスカッションを行う。





いしかわ MOT シンジケート改革活動紹介
北陸の企業を元気にする
～もやもや感を吹き飛ばし、やらされ感からやるぞ感へ～
いしかわ MOT シンジケート幹事 砂崎 友宏 氏

【講演要旨】

いしかわ MOT シンジケートとは、いしかわ MOT スクールの卒業生で構成されている。

いしかわ MOT スクールのメンバーは、ほぼ全員が企業派遣である。JAIST の MOT 講座は最初に東京で始まり、いしかわの後は七尾市や能美市・加賀市の伝統工芸へも移植されている。

いしかわ MOT シンジケート発足のきっかけは、MOT スクール修了後も「もやもや感」を解消する場を継続しようと考えたことである。月 1 回の勉強会（企業訪問）を開催することから始めた。石川の場合は幸いなことに、経営者に理解がある環境なので、

メンバー企業への訪問を快く受け入れて頂いている。これまでに体験交流会として、小松電子、ニッコー、PFU、朝日電機、明和工業、芳珠記念病院、澁谷工業などを訪問した。また、七尾市や東京方面（熊谷、草津）へも出かけ、交流会をおこなった。さらに、これらの企業同士で訪問しあうようにもなった。

毎回の参加者は 20 人前後である。その結果、ビジネスにもいくらかの影響が現れている。いしかわ MOT シンジケートによる MOT ネットワークを、今年は全国に向けて発信していきたい。



パネルディスカッション

【モデレーター】

いしかわ MOT シンジケート代表幹事

滝本 幹夫 氏 (ニッコー株式会社)

【パネリスト】

いしかわ MOT シンジケート

高村 昌克 氏 (小松電子株式会社)

仲井 培雄 氏 (医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院)

上田 浩司 氏 (澁谷工業株式会社)

東京 MOT

藤原 哲郎 氏 (ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク)

佐竹 右幾 氏 (サンシン電気株式会社)



付箋紙へのコメントと回答、およびパネリスト意見（文中敬称略）

<澁谷工業>



- ・スクリーンがすばらしい。（七尾市役所・瀧音）
- これまでのプロジェクターでは会議室を暗くする必要があり、机上でも邪魔になった。このスクリーンはホームセンターで最適な厚さの亚克力板を買ってきて作った。（澁谷工業・上田、村松）。



<小松電子>



- ・地域のリサイクル、ぜひ成功して欲しい。（東京 MOT・北岡）
- ・地域貢献。（PFU アクティブラボ・宮本）
- ・地域への貢献は地元企業が地元密着で。（パネリスト・藤原）
- 保育園でも生ごみの分別はできる。食育の価値。授業の教材として利用。（小松電子・高村）



<芳珠記念病院>



- ・CS（Customer Satisfaction）。病院に安心が欲しい。（小松電子・滝川）
- 「不安を安心に」というキャッチフレーズは、MOT 交流会で生まれた（芳珠記念病院・仲井）。



<横山商会・朝日電機製作所>



- ・製品の先にあるユーザーをイメージすると、もっともっと楽しくなる。（東京 MOT・小林）
- ・人間、信ずれば出来る。（パネリスト・佐竹）

<サンシン電気>



- ・球状にこだわったデバイスの開発。（近藤教授）
- 球状デバイスの実用化に 5 年掛かった。（サンシン電気・佐竹）



<ニッコー>



- ・改革は自然との調和から。(東京 MOT・河野)
- ・改革のイメージが伝わる展示だ。(パネリスト・藤原)

<PFU>



- ・まずやってみるという経営姿勢。(東京 MOT・増田)
- ライジング V 活動で個々人の意見をつぶさないようにしている。(PFU・多河)
- ライジング V 活動は、現社長(技術者出身)が推進している。

年間 30 件位の申請のうち、約 30%がなんらかの形となっている。(PFU・山口)



[モデレーターの総括]



最後は人、という気持ちを切らさないようにするのが大事。
この MOT の会に出ると元気がでる。今後とも、いしかわ MOT
シンジケート、東京 MOT への応援をよろしくお願ひしたい。
(モデレーター・滝本)

まとめと講評
北陸先端科学技術大学院大学 学長補佐 近藤 修司 教授

【講演要旨】

今日のセミナーで感じたことは、「ここまでやるか MOT、ここまでやるぞ MOT」である。この交流会は毎年行っているが、今年は IT センター鎌田さんの「見本市をやろう」というアイデアを実現するため、皆さん真剣に検討された。昨年までは「近藤マジック」（中森先生談）が強すぎたが、今年はたくさんの「マジック」が重なって知識創造の場となった。知識科学は進化している。ここまでやるか MOT、が現状の姿である。



ありたい姿は、「感動」である。感動しあうことを大切にすること、自分だけでなく仲間同士、お互いに感動で共鳴することである。狭い意味の知識が感動を阻害している。交流し感動しあうことで、脳の中で細胞が活性化するのだろう。この瞬間が「やるぞ感」だ。この感動体験が、ありたい姿である。

なりたい姿は、シンジケート組織の全国発信を実現させることである。それぞれの立場で、お互いに発信して欲しい。

実践する姿は、四画面の振り返りであるが、これを 100%実践するのは難しい。実践する組織とは、まずやること。そして YWT（やったこと、わかったこと、つぎにやること）がうまく回っていることである。黒字の追求のためには、新しいこともやらなければならない。

いしかわ MOT シンジケートは今後、全国的に見ても新しいソーシャルイノベーションのモデルを追究し、社会に貢献する組織となって欲しい。



(会場準備および運営)

株式会社 石川県 IT 総合人材育成センター

いしかわ MOT シンジケート

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 近藤研究室

(報告書編集)

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士後期課程 平松 章男

